

梅鶯仏教壮年会報

第121号
2014年
11月16日

報恩講

―法輪寺報恩講と併修―

期日 十一月二十二日（土）
講師 （午前）藤 真照師
（午後）藤 浪正明師

午前 十時 日中法要・お説教
午後 一時半 速夜法要・お説教
午後 四時半 御伝鈔
梅鶯仏教壯懇親会

梅鶯仏教壮年会員であります
森勝昭氏（法名勝俊）が、こ
の度、浄土真宗本願寺派（西
本願寺）の得度式を受けられ
僧侶となりました。

蝶は花を求めて舞い、
花は蝶を待って咲く。
そのように―
すべてのものには他者との
かわりにおいてこそ、
かかわりを活かして生きられる。

寺川幽芳先生「こころの掲示板」

「日本人つて
やつぱり素晴らしい②」

田中 薫（坂田組仏教壮会長）

前号からのつづき

頂から無事下山し、
立山駅の駐車場で、
着替えをした後、
長浜の花火を見物
しながら一杯やる
ことを楽しみました。



路を急ぎました。
自宅に帰ってすぐに携帯電話を
充電しようと思ったところ、携帯
電話やカメラ、思ったところ、携
帯電話に入れていたポーチが無
いことに気がきました。

急いで着替えたときにポーチ
を駐車場の地べたに置き忘れた
です。

殆どあきらめたのですが、翌日
念のため立山警察署に遺失物届
を出すことにしました。

得物の届は出ているには案の上、拾
得物は先ず一もう出でません

の、留守電に立山観光岳岳口
日、留社より、「ポーチを拾得し
て、預かっています」との思いが
ないメッセンジャーが入っており

た。

それにしては、
電話番号が分かつた
のでしようか。

等、実は、山岳遭難

を考えてヘッドラ
イトに住所と自宅

の電話番号を書い
ていたのが幸いした

遺失物が持ち主にな
るなんて、一昔前なら

も、知れませんが、海
外ではもとより、いま

です。有り得ない辛
い世間を考えがち

「いやー、日本人
って本心に素

晴らしいな」と心底
感激いたしました。

また、立山署から
後にお気遣いの電話

た。立山連峰の素
上に、素晴らしい景

出をいたしたい今
年の夏休みでござ

いしました。

にも会えました。

また是非立山の山

岳温泉に入りに行

きました。



題材法話

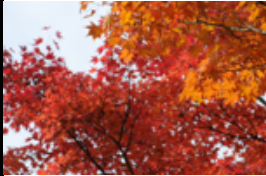
本年3月に、母寿子が往生の素懷を遂げました。お棺に収まった母親に、生前母が着用していた布包と輪袈裟を着せ掛けたのですが、なにか子供の頃、母がその法衣姿でご門徒宅をお参りしていた姿が浮かんで参りました。

父親が西本願寺の宗務員を勤めていた関係で、日常は自坊を留守にしており、速夜参りは母親の勤めだったのです。

夕方方に遊び疲れて家に帰ったから母が居ない。どうしたのかと、なにか寂しく不安な思いをしていて、ところへ、その法衣姿でお参りから帰って来てほつとすると、そのような思い出が浮かんできたことでした。

○母の呼ぶ声

ところで、最近の子供達は、昔の子供達ほど外で暗くなるまで喜々と遊ぶといううなことがなくな



ってきました。物騒な事件や事故が多いことや、室内でも楽しく遊べるものが多くなってきたというところが、その原因のようですが、昔は、みんな毎日、日が暮れるまで夢中で空き地や道路で、遊んだものです。

学校から「ただいま」と帰るやいなや、母親が「宿題せなあかんよ」という声も上の空で、ランドセルを放り出して日の暮れるまで一生懸命外で遊んだもので

す。ところろが日が暮れて、ラスがねぐらに帰る頃になつて、どこからか「ごはんやで」という母親の声がする。

その途端、どんなわんぱく坊主でも、一目散に家に帰ったものでした。

そして、今のようにご馳走なんてまったくなかつた時代ですが、なにか楽しくて、豊かな気持ちで晩ご飯を食べ、一家



団欒の時を過ごしたような気がします。

○弥陀の呼ぶ声

その、どんなわんぱく坊主でも、一声で家に飛んで帰らせる母親の呼び声とは一体何なのでしょう。

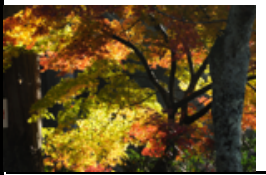
それはまさに、子と思う親の心、母親の心が、そのまま子供の心に伝わり、理屈抜きに子供の足を家に向かわせるからでしょう。実は阿弥陀さまの呼び声もまさにそうなのです。

娑婆の世界に明け暮れている私たちに、大悲の親が「間違ひなく帰ってこい」と呼んで下さる呼び声が、南無阿弥陀仏なのです。

南無阿弥陀仏の六字の名号は、如来大悲の結晶なのです。

親鸞聖人は「本願召還の勅命」と呼ばれています。

このままでいけば、日が暮れてきたというのに、ど



こをどうさまよい歩いているかも分からないのがこの私です。

その私に「間違ひなく帰ってこいよ」と、呼んで下さる母親の声そのものなのです。

まさに「召還の勅命」なのです。

○豊かさの日々

われ称えわれ聞くなれど南無阿弥陀仏つれていくぞの親のよび声

と悦ばれた詩があります。私たちの娑婆世界では、堪え忍ばなければならぬことも多くありますが、しかしその日暮らしの中で、嬉しいにつけ、寂しいにつけ、悲しいにつけ、如来の大悲を心に頂きながら、一念仏の生活を送らせて頂くところこそ、念仏者の豊かさがあるのだと思います。

H26 彼岸会住職法話

